

語る、
交差する、
そして
映画が生まれる。

Conversations, Crossings,
and Cinema

KINO Meeting presents:
Multicultural Film Festival

KINO Meeting presents: Multicultural Film Festival

「語る、交差する、そして映画が生まれる。」

02 はじめに

04 上映作品紹介

08 「間」から差し込む命の本質 木村友祐

12 『夏休みの記録』制作後記 川田淳

16 『人間ピラミッド』の映し出す多様な群像 鈴木裕之

20 KINOミーティングについて

はじめに

KINOミーティングは、2022年の発足時からこれまで、さまざまなかたちで“海外に（も）ルーツをもつ人たち”との映像制作に取り組んできました。主に公募をもとにメンバーを集め、東京各地で実施した3日間の短期ワークショップを出発点に、1ヶ月から1年弱の中・長期間の作品制作プロジェクトへと発展させてきました。

KINOミーティングの現場では、必ず複数人によるグループワークをととして作品を作ります。ルーツが異なる他者との共同制作では、文化背景や第一言語が異なるなかでのコミュニケーションが求められますが、そうした場で実践される一人ひとりの工夫から、独特な協働関係や映像表現が生み出されていきます。

そうした成果を共有し、さらに議論を深めていくために企画した本映画祭では、「語り」と「交差」という二つのテーマを設定しました。まず、ここでの「語り」は、映画に登場する／映画を制作する個人の声を指します。海外に（も）ルーツをもつ当事者たちの語りを起点にした物語は、ラベリングによる先入観を解きほぐし、かれらが眼差している現実的な風景を映画として映し出します。そして、そうした語りは異なるルーツをもつ人たちの間で「交差」の起点となります。ひとりの語りは、別のものたちの語りを引き出し、新たな物語の断片が生まれ、その連なりが多様なルーツをもとにした経験や視点が反響し合う映画を生み出します。

本映画祭では、そうした「語り」「交差」から映画が生まれる過程を垣間見ることができる5作品を上映します。KINOミーティングからは、ワークショップ参加者による自身のルーツに関する語りや東京の風景に重なる小作品群「シネマポートレート」、そして多様なルーツをもつワークショップ参加者との協働により制作されたフィクション作品である『ニュー・トーキョー・ツアー』と『オフライン・アワーズ』を取り上げます。加えて、個人的な関わりから在日クルド人の日常を捉えた川田淳監督によるドキュメンタリー作品『夏休みの記録』、そしてフランス植民地時代のコートジボワールの高校にて、白人・黒人生徒と共同で制作されたジャン・ルーシュによる実験的な映画『人間ピラミッド』を招待作品として上映します。また、映画上映とともに、さまざまな分野の専門家や実践者を招いたトークセッションを実施することで、鑑賞体験を深掘り、共有する場をつくります。

自身とは異なるルーツをもつ他者と共に在ること／つくること。そこにはさまざまな魅力と発見が詰まっています。本映画祭が、「映画」という多様なルーツが交差する地点から、その魅力について考える機会となることを願っています。



『ニュー・トーキョー・ツアー』+ メイキング 制作：KINOミーティング／2022／80分

仕事を無くし、恋人とも別れ、このまちに住む意味を失いかけているリー。ある日、そのまちに来たばかりのト・シキとの偶然の出会いから、リーはト・シキの観光ツアーに巻き込まれていく。“海外に（も）ルーツをもつ”人々による実体験のエピソードから着想を得た物語は、さまざまなルートを経てその地に辿り着いた人々が織りなす“東京”の風景を描き出す。

本作は、KINOミーティングの前身のプロジェクト「Multicultural Film Making —ルーツが異なる他者と映画をつくる」のなかで制作された。KINOミーティングの運営スタッフのひとりである台湾出身の鄭禹^{ていうしん}監督のもと、ワークショップに参加した“海外に（も）ルーツをもつ”メンバーが俳優、撮影クルーとして制作にあたった。

制作過程では「ドキュメンタリーの部」と「フィクションの部」の二つのパートが設定され、「ドキュメンタリーの部」ではシネマポートレート（P.06）のワークショップ等を実施しながら、メンバーの個人的なエピソードを拾い上げた。それらをもとに鄭監督がまとめあげた脚本を用いて「フィクションの部」で撮影を行い、ひとつのフィクション作品が完成。「メイキング」では、さまざまなルーツをもつ人たちの協働をととして、個人の語りが重なり、一本の映画作品がかたちづくられていくプロセスを追うことができる。

* 詳細な解説は、ウェブサイトにてご覧いただけます。



レポート：
「Multicultural Film Making
—ルーツが異なる他者と映画をつくる」



『オフライン・アワーズ』+ ドキュメンタリー 制作：KINOミーティング／2025／120分

東京のとある深夜。残業で会社に居残る“海外に（も）ルーツをもつ”人々による日常のさやかなやりとりが切り取られる。「春」「秋」「冬」の3つのシーズンごとにエピソードが展開され、登場人物たちそれぞれの小さな決断が描かれるオムニバスムービー。

制作プロセスでは、春の部、秋の部、冬の部と3つのシーズンに分けて制作・撮影を実施。制作チーム内には、以下4つの部署を設け、参加メンバーたちは、シーズンごとに所属部署をローテーションした。

- ・演出部：物語をつくり、演出する（監督／脚本／スクリプターなど）
- ・俳優部：キャラクターをつくり、演じる（俳優）
- ・技術部：撮影、録音する（カメラ／音声）
- ・美術部：画面に映るものをデザインする（美術／小道具）

役割を入れ替えることで、制作プロセスのなかでのヒエラルキーの固定化を避け、ひとつの作品により多様な視点を持ち込むことを試みた。本編と対をなす「ドキュメンタリー」は、このプロセスの困難さと可能性を映し出す。

* 詳細な解説は、ウェブサイトにてご覧いただけます。



レポート：
映画制作プロジェクト
2024



レビュー：映画づくりと新しい共同体のかたち
映画『オフライン・アワーズ』とKINOミーティング
執筆者：三好剛平（三声舎／Asian Film Joint）



「シネマポートレイト」 制作：KINOミーティング／2022～2024／各2分

自身のルーツを探す小さな“旅”をするワークショップをとおして制作された作品群。
ワークショップ参加者たちは、まちを歩き、自身のルーツとリンクする風景に出会い、その場所／瞬間が想起させたエピソードを語る。そして、3人1組で以下の3つの役割をローテーションしながら、それぞれの旅を記録する。

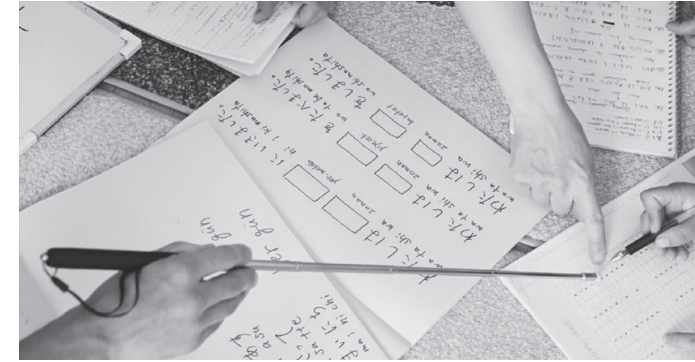
- ・探す人：まちで発見した自身のルーツについてエピソードを語る
- ・録音する人：「探す人」が語るエピソードをレコーダーで録音する
- ・撮影する人：「探す人」の旅の様子をインスタントカメラ（10枚）で撮影する

旅のなかで記録した音声と写真を組み合わせたものが映像作品となる。参加者の語るエピソードは、自身の生い立ちに関すること、大切な人との関係性、自身の未来のこと、そしてふと思い出した些細なことまでさまざまである。そして、その語り自体もアクセントのある日本語で話されたり、途中で英語や中国語などそれぞれが得意とする言語に切り替わる。映像では、そのような別の場所／時間についての語りや、その日に撮影した東京の風景に重なる。それらの間に生まれる乖離は、地理的／時間的な複数のレイヤーを生み出し、視聴時にはその間を行き来する特異な映像体験をもたらす。

* 作品と詳細な解説は、ウェブサイトにてご覧いただけます。



手法1：
シネマポートレイト



『夏休みの記録』 監督：川田淳／2025／95分

日本語の学習支援を通じて、在日クルド人との交流を映し出したドキュメンタリー。川田淳監督が、同じマンションに暮らすクルド人姉弟が夏休みの宿題をする様子や、母親たちが日本語を学習する様子を記録して、メディアで報じられる悲劇的な難民ではなく、SNSで語られる暴力的な存在でもない、ごく普通に生活しているクルド人に焦点を当てる。



Credit: Les Films du la Pléiade

『人間ピラミッド』 監督：ジャン・ルーシュ／1961／88分

フランス植民地時代のコートジボワールの首都アビジャン。現地の高校では、入植者のこどもたちである白人生徒とアフリカ系の黒人生徒が、同じ教室で授業を受けるものの、私生活のなかでは互いに関わり合いたくない状況があった。映像人類学のパイオニアであるジャン・ルーシュは、双方のグループに交流を求め、一緒に映画をつくることを提案する。

「間」から差し込む命の本質

木村友祐 小説家

海外に（も）ルーツをもつ人々とはいえ、その背景はじつに多様で、ふだんの暮らしでは接点がない場合がほとんどかもしれない。そうした人々が「KINOミーティング」という場に集い、互いに背景を聴き合い、撮る／撮られるという立場を交換しながら映画を作るといった画期的な試みに身を投じた。

そこから生まれた二つの作品『ニュー・トーキョー・ツアー』と『オフライン・アワーズ』。どちらも日々のごく些細なエピソードの連なりなのに、なぜこうも食い入るように見入ってしまうのだろう。

海外にゆかりのある一人ひとりの、ぼくの知らないふだんの素の姿を見ているような感覚。物語の人物なのだからリアルなその人自身ではないのに、なぜか、そこにはありのままの事実が映しだされていると感じる。

失恋を引きずり、ピザの期限が迫る中で仕事を探す韓国人のリー。ゲストハウスの自分の部屋で求人サイトを見るリーの髪はやや乱れ、目つきが厳しい。ドラマ仕立ての愛想笑いも飾り気もないナマの姿。人と交流するのがあまり得意ではなさそうなところに、ぼく自身や身近なだれかを重ねてしまう。

そのリーと親しい、日本生まれ日本育ちの韓国人であるキム・イナは、当然韓国語が話せるものとの周囲の素朴な期待に応えられない。飲み会の帰りに自転車を押しながら「最悪だ」「なんか、うまくいかないな……」とつぶやく。どちらも上手に世渡りできない生きづらさを抱えていて、だれも知らないところでそっとため息をつく。リーとキムの距離感もどことなく微妙で、そこには、どこの国から来たとか、ルーツが日本ではないとかを越えた、生きることにともなう摩擦の中にいる「人」そのものの姿が映しだされている。

一方、オムニバス作品『オフライン・アワーズ』では、ささやかなこだわりや悩みや出会い直しを描いた三編ともに日本で仕事をするアジア系の人物が描かれているのだが、こちらでは三話目のクリスをはじめどの人物にも、日本で暮らすことに気負いも引け目もないごく自然な存在感があって、なんだか惚れ惚れして見てしまう。

どこかでぼくは、日本という、異質なものに過敏な人々の国で暮らす海外ルーツの人たちは、身を縮こめて暮らしているのではないかというイメージを持っていたようだ。それは同情を寄せる対象として「そうであってほしい」という期待でもあったかもしれないが、『オフライン・アワーズ』は、そうしたこちらの（マジョリティとしての日本人の）勝手な先入観や期待を気持ちよく覆してくれる。メイキング映像における中国語での侃々諤々のやりとりを観ればさらにそう思う。

そうなんだ。海外にルーツがあるからといって、人がそこで暮らすことに本来説明なんかいらないし、当然、引け目を感じる必要もないんだ。なのに、リーのように、就職の面接で「なんで日本で仕事を続けたいと思ってるんですか」などと聞かれてしまう。リーは本気で答えにつまり、「日本に住んでいるから日本で仕事を探してるだけです」とほんとのことを言っても不採用となるのだが、この社会で生活していくには、だれしも仕事に就いてお金を稼がなければならないのは当たり前のお話だろう。おそらく日本で暮らす、海外に（も）ルーツをもつ者たちが共通して抱える違和感やわだかまりは、そこにあるのではないだろうか。ただ国をまたいだというだけで、生きていくことの当たり前が通じなくなるということに。

『ニュー・トーキョー・ツアー』で、写真を学びに来日したト・シキはビルとビルの間を写真に撮り「真ん中のことが大好き」と言う。中国の生活と日本の生活、どちらが好きとよく人に聞かれるが、全部が好きだと。また、ト・シキがリーを誘って行った絵画展では、在廊していた画家が、自分は男女のどちらにも入りにくいと話す。この画家もまた、真ん中にいることが自分のリアリティだと感じているのだった。

それは真ん中という「間」に置かれた者の特殊な例ではなくて、むしろ人の生の実際の姿ではないかとぼくには思えてくる。国家とか性別だとかの自らを縛りつけるものからはみだしたり揺らいだりする、ありのままの命の姿として。『ニュー・トーキョー・ツアー』と『オフライン・アワーズ』はそのようにして、海外ルーツの人々に見えている「間」の

視点を映しながら、いつしか人が生きることの本質的な姿をも垣間見せてくれるのだった。これは「KINOミーティング」に集った者たちが、お互いに自らを開示して、楽しいばかりではない面倒な協働に果敢に挑んだことから生まれた前例のない成果だ。

二作ともメイキング映像も含めての作品といえるのだが、制作現場自体が、摩擦はあっても血の通った交流のある、ちいさなあるべきもうひとつの社会をつくる試みだったのかもしれない。

木村友祐（きむら・ゆうすけ）

小説家。愛猫家。郷里の方言を取り入れた『海猫ツリーハウス』（集英社）でデビュー。演劇プロジェクト「東京ヘテロトピア」に参加し、東京のアジア系住民の物語を執筆。著書に『幼な子の聖戦』（集英社）、『イサの氾濫』（未来社）、温又柔氏との往復書簡『私とあなたのあいだ——いま、この国で生きるということ』（明石書店）、『猫と考える動物のいのち』（筑摩書房）など。



『夏休みの記録』制作後記

川田淳 映像作家・『夏休みの記録』監督

■制作経緯

私が在日クルド人の人々と同じ地域で暮らしていたのは2018年から2024年の間ですが、彼らとの出会いは2019年でした。

当時、東京オリンピックを前に出入国在留管理庁の施設に収容される人々が増え、長期収容の問題などがメディアで大きく取り上げられていました。そこで、実際に何が起きているのかを知るために、被収容者と面会することにしました。面会では様々な国籍の人々と出会い、その中にクルドの人々がいました。そのクルドの人たちと面会室で話すと、彼らが自分の家の近所で暮らしていることがわかりました。それからは、被収容者から「家族の写真を持ってきてほしい」と頼まれたりするなどして、徐々に交流が深まっていきました。

また、その時期に、面会活動が続ける中で2人の日本人の方と出会いました。その方々はそれぞれに、クルド人の子どもたちの家を訪問し、宿題の手伝いなどを個人ボランティアとして行っていました。その活動に同行させてもらうことで、私もクルドの子どもたちの学習支援に携わるようになりました。そのようにして自然と交流が広まり、学習支援だけでなく、一緒に食事をしたり、遊びに行ったりするなどして、日常的に関わるようになっていきました。そうした日々の交流の中で、家族ごとの事情や想いにも少しずつ触れるようになりました。

例えば、難民申請理由に関しても、家族ごとにその事情や理由が異なることを、彼らと付き合っていく中で知ることになりました。また、子どもたちにおいては、今後も日本で暮らしていきたいという想いで努力をしている子もいれば、遊ぶことに夢中で日本語の定着が遅れ、なかなか学校での生活に馴染めない子もいます。他には、早くトルコに帰った

いと落ち込んで過ごしている子とも出会いました。そのような様々な事情・想いを抱いた人々と出会ってきたことから、私は近所に暮らす者として、彼らと「ひとりの人」として向き合ってきました。

一方で、彼らは「ひとりの人」として見られるのではなく、「クルド人」「難民」「仮放免者」という括りで語られ、ひとりひとりが持つそれぞれの背景や文脈、想いなどは置き去りにされてしまうことが多くあります。ですが、その置き去りにされた背景や文脈こそが、ひとりひとりの存在を形作る大切な要素であり、それらを見捨てることは、他者を単なる記号として扱ってしまうことにつながってしまいます。そうした背景や文脈をもう一度掘り上げ、「ひとりの人」としての存在を描くために、普段から交流している日常的な姿を記録した映像を制作しようと考えました。

■本作について

本作には何か大きなストーリーがあるわけではありません。たわいのない会話やなんてことのない風景ばかりの映像です。ですが、私はそうした日々のささやかな光景や、ふと交わされる言葉のひとつひとつにこそ、単純化・記号化できないその人の想いや背景があると感じています。

例えばこの映画において、母親たちが床に座って勉強する姿が写されています。一方で、子どもたちは机に向かって勉強しています。私が出会ってきたクルド人家族の中では、子どもが勉強するための机と椅子がある光景は、決して当たり前のものではありません。その机と椅子には、子どもたちには今の日本の様式で勉強してほしい、これからもこの場所で生きてほしいという、親の想いが詰まっています。

この映画に記録された小さな風景や、ふと交わされる言葉のひとつひとつには、それぞれの人の背景や想いがあります。そうした小さな風景や何気ない言葉の前で立ち止まることが大切なことだと、私は感じています。

■最後に

本作鑑賞後に、スクリーン越しに出会った人たちを、自分の言葉や感性で描写した時に、「クルド人」や「難民」「仮放免者」といった言葉を用いずとも、彼女たちや子どもたちのことを描写できるのではないのでしょうか。

本作が「クルド人」や「難民」「仮放免者」ではなく、「ひとりの人」として出会い直す経験の場となることを願っています。

川田淳（かわだ・じゅん）

1983年埼玉県生まれ。2007年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。沖縄で戦没者の遺骨を掘り続ける男性の手伝いをしながら、遺留品の遺族を探し求める作品『終わらない過去』、中国と沖縄で戦争体験をした元日本兵の証言を記録した作品『生き残る』、ハンセン病回復者の方と追い出された故郷や隔離されていた施設を共に訪れ、その記憶を辿った『石山さん』などを制作。今までに美術館や映画祭などで作品を発表している。



『人間ピラミッド』の映し出す多様な群像

鈴木裕之 文化人類学者

時は1959年、ところはフランス領コートジボワールの首都アビジャン。登場人物は17～18歳の高校生。数年前に植民者の子女、つまり白人と、「開化民」と呼ばれるアフリカ人エリートの子、つまり黒人の生徒による混成クラスができたが、教室以外で白人と黒人が交流することがない。そこでジャン・ルーシュが仕掛ける。人種差別をテーマとして、ラフなストーリーで素人の学生たちに演技させたのだ。その際、彼らが自由に会話・演技する余地を大幅に与え、フィクションとドキュメンタリーを融合させた群像劇に仕上げたのが本作である。

監督のジャン・ルーシュについて、映像人類学者としての業績やヌーヴェル・ヴァーグとの接点など、映像クリエイターとしての側面はネット検索すれば一通りの情報を得られるので、その作業は各人にお任せするとして、ここでは私なりの鑑賞ポイントを紹介させていただこう。

コートジボワールの独立は1960年8月7日。まずは独立直前のアビジャンの街並みや風俗が映像で見られる、ということが私のようなアフリカ研究者には興奮ポイントなのだが、みなさんにとっては、やはり白人と黒人のあいだの相互理解が可能か、というテーマがどのように表現されているかが見どころとなろう。各学生には役割が与えられているが、素人ゆえに演技が生々しく、セリフにも各自の信条がおおきく反映されており、作りこまれた映画にはない妙な説得力がある。

登場人物はそれぞれに個性的だが、とりわけ主要な役割を果たす4人の女性に注目してみよう。

ナディーヌは父親の赴任にともなってパリからアビジャンにきたばかりの美形の白人女性。人種問題についてリベラルな彼女がクラスにおける白人と黒人の交流を提言し、物語が起動する。ただ「リベラル」ゆえに男女関係における友情と恋愛の線引きも曖昧で、白人・黒人ともにおおきの男性が巻きこまれ、人種問題と恋愛問題がごちゃ混ぜになってしまう。

いっぽう、ジャクリーヌは典型的な人種差別主義の白人女性。竹を割ったような性格で、「白人＝文明／黒人＝野蛮」図式を歯に衣着せずビシバシと表明していく。その言葉に反感を持たれるかもしれないが、少なくとも彼女は偽善者ではない。あまりに正直なので、あやうく好感を持ってしまいそうになるほどだ。

ドニーズは優等生の黒人女性。知的で政治的意識も高いが、思慮深くバランス感覚に優れ、アフリカ的な柔軟性も持ちあわせている。思春期で羽目を外す級友を批判的な眼で見ながら、けっして友情をおろそかにはしない。

いっぽう、ナタリーはアフリカ人街の洋服店で働く黒人女性。高校生ではないが、美人で快活な人気者のため、高校の友人サークルにゲスト的に加わることとなる。唯一、近代的学校教育の外に生きるアフリカ人を代表している。

映画は男性どうし、女性どうし、そして男女間の友情の芽生えから発展を描写しながら、人種を超えた相互理解の可能性を探っていく。そこには明確な答えも図式もなく、友情がときに成就し、ときに破綻していく。そしてナディーヌの「リベラル＝優柔不断」な態度を巡って男性のライバル関係が過熱し、悲劇的結末にいたる。

そしてラストシーン。パリに帰ったナディーヌと、留学してきたドニーズと、ふたりの男性級友が並んでシャンゼリゼ大通りを仲良く歩いている。高校を卒業したドニーズがパリに留学しているので、コートジボワール独立直後の1960～61年頃だろう。そこにドニーズのナレーションが入る。

「相手の長所を知るのはただの社交、相手の欠点を知るのは愛」（DVD字幕より）

これはアフリカのことわざだという。たがいを理解しようと努力してみたが、誤解のなかで傷つけあうこともあった。だが愛をもって相手の欠点をも受け入れねばならない。白／黒／男／女が肩を並べるシーンは、まさに「めでたし、めでたし」の大団円である。

でも、ふと思う。こんなエンディングでいいのだろうか。こんな表面的なつじつま合わせでいいのだろうか。

ここにはふたりの女性が欠けている。あの差別主義者のジャクリーヌはこのエンディングを見てどう思うであろう。アフリカ人街で催される民衆的祭りで見事なダンスを披露していたナタリーは、アビジャンでどうしているのだろう。

映像では前者の差別観の頑なさが印象的であったが、あれから約65年たった今日、その頑なさがふたたび世界を覆いつつある。また下街での祭りや廃船でのピクニックの場面で映しだされたアフリカ人たちの「身体性」こそは、西洋合理主義に基づく学校教育には回収されない独自の「人間性」の発露である。

この映画はたしかにそれらを記録し、私たちにを見せてくれる。ラストのちょっと偽善的なオチに感動しながらも、様々な場面で表明される多様な価値観を見逃さず、自分なりの「引っかかり」を見つけるのが、この映画の「お得」な鑑賞法ではないかと私は思う。

鈴木裕之（すずき・ひろゆき）

文化人類学者。国士館大学教授。アフリカの音楽と文学を研究。コートジボワールのアビジャンにおけるストリート音楽（レゲエ、ラップ）、マンデ民族のグリオによる音楽と現代作家による小説の研究をすすめている。著書に『ストリートの歌：現代アフリカの若者文化』（世界思想社）、『恋する文化人類学者：結婚が異文化をつなぐとき』（角川ソフィア文庫）、編著書に『アフリカン・ポップス！：文化人類学からみる魅惑の音楽世界』（明石書店）がある。



credit: Les Films du la Pléiade



「KINOミーティング」は、“海外に（も）ルーツをもつ人たち”を対象にして、映画制作のワークショップを展開するアートプロジェクトです。ワークショップの参加者はまちを歩きながら、写真、映像、音声を使い、さまざまな方法で自分自身のルーツと向き合います。そして、自身とは異なるルーツをもつ人たちとグループを組み、互いの視点を交換し、協働しながら映画作品をつくります。制作の過程で生まれる新たな映像表現、新たなコミュニケーション、新たな協働関係のあり方を発見すること、そしてその手法を確立して発信することを目標としています。

【お問い合わせ】

KINOミーティング事務局

kino.meeting.tokyo@gmail.com

詳細情報

kino-meeting.com



【映画祭】

協力：Les Films du la Pléiade 細川晋 碓井千鶴

記録撮影：鶴若仰太

【パンフレット】

制作：KINOミーティング 印刷：グラフィック 発行日：2026年2月28日

発行元：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス5階 TEL：03-6256-8435 FAX：03-6256-8829

【KINOミーティング】

運営スタッフ：阿部航太 関あゆみ 鄭禹晨 森内康博

アーツカウンシル東京プログラムオフィサー：川満ニキアン 小山冴子

主催：東京都 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 一般社団法人バンタナル

本事業は「東京アートポイント計画」として実施しています。東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」をつくるために、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOとともに展開している事業です。実験的なアートプロジェクトをとおして、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。また、自治体と文化事業を共催する「東京都・区市町村連携事業」を実施しています。 <https://www.artscouncil-tokyo.jp/>



KINO Meeting presents: Multicultural Film Festival

「語る、交差する、そして映画が生まれる。」

東京都現代美術館 講堂【B2F】

2026年2月28日（土）・3月1日（日）

トークセッション ゲスト

大橋香奈 東京経済大学コミュニケーション学部准教授

川田淳 映像作家・『夏休みの記録』監督

管啓次郎 詩人、明治大学理工学部教授

高谷幸 社会学者、大学教員

川上幸之介 キュレーター、大学教員

プログラム

DAY1 (2/28土)

10:15 **Program A** 開場
10:30 「シネマポートレイト」
10:40 「ニュー・トーキョー・ツアー」
12:00 トークセッション A
登壇ゲスト：大橋香奈
12:40 終了

13:45 **Program B** 開場
14:00 「シネマポートレイト」
14:10 「夏休みの記録」
15:45 トークセッション B
登壇ゲスト：川田淳
16:25 終了

DAY2 (3/1日)

10:15 **Program C** 開場
10:30 「シネマポートレイト」
10:40 「人間ピラミッド」
12:10 トークセッション C
登壇ゲスト：管啓次郎
12:50 終了

13:45 **Program D** 開場
14:00 「シネマポートレイト」
14:10 「オフライン・アワーズ」
16:20 トークセッション D
登壇ゲスト：高谷幸・川上幸之介
17:00 終了